



ほくもわたしもやってみたい！
認定こども園長万部マリア幼稚園

子どもが成長する過程の中で大事な時期である『敏感期』って聞いたことはありますか？何かに強い興味を持ち、特別に敏感な感受性を持つ時期のことで、やってみた気が湧いてきていて、その時期に集中して繰り返す中で、できるようになった体験はその先につながると思えます。園内では、教育部の3歳以上の子どもたちが身の回りのことから日常生活の中で必要な作業や知的・感覚的に手先や脳を使って様々な体験をすることを『おしごと』と呼び、子どもたちは、登園してくると自分の選びで『おしごと』を始めます。そんな中、今回は、保育部の0〜3歳の



子どもたちにスポットを当ててみたいと思います。お家の人から離れて園に来ることがまず、第一歩である中、成長に伴いできるようなることが増えていきます。自分の上着をハンガーにかけたり、所持品を自分の棚にしまったりした後は、こちらも棚の中から好きなお道具をテーブルまで運び、椅子に腰かけて『おしごと』を始めます。気に入ったことは繰り返し何回も何回も行います。その真剣な眼差しに私たち保育者は傍らで寄り添いながらも必要以上に声はかけません。だって、まさに今『敏感期』真っ只中なので、小さな手でトングを上手に扱い豆やスポン



雪だるまも仲良し♡
いずみ保育園

ジをつまんだり、利き手でハサミを持ち、紙を切り落としたり、全部切り終わったときの達成感を味わってしまったら、もう必ずと言ってよいほど『もういいかい！』と言います。年齢・志向・器用性を見極めながら、教具・教材を準備し、元の場所にしつかり戻すまでが一連の流れとなります。普段何気なく行っている行動一つ一つが積み重ねの中で習得につながり、次の階

冬休みが終わって、園庭の雪もフワフワに積もり、いよいよ大好きな雪遊びが始まりました。新園舎になって、園庭や裏庭、お寺の境内と遊ぶ場所が増え、保育士も子どもたちと一緒に「今日は何処で遊ぼうか？」とワクワクしています。裏庭の築山から米ソリを使って思い切り滑る子どもたちの歓声。園庭では、ひたすらスコップで雪を掘り続けている子どもたちの生き生きとした眼差し。大きい子たちは、境内で作った雪だるまを、「持って帰りたい！」と言うので園舎の前までソリに載せ



て運びました。お迎えのお母さんたちに見てもらい満足そうな表情の子どもたちでした。翌日の土曜日は、少ない登園でしたが、やっぱり雪だる



ま作りがスタートしました。石や木の枝を見つけてお顔を作り、手袋も履かせて完成！うれしくて雪だるまの頭を撫でていた姿はとても微笑ましいものでした。今年も、長万部の自然と仲良くふれあって、楽しい思い出をいっぱい作っていきたいです。

写真で見る学校の様子

長万部高等学校

長万部中学校

長万部小学校



12月25日
体育大会



12月5日
幼稚園訪問 (1年生)



12月1日 5年生
12月8日 6年生 人権教室



12月25日
体育大会



12月14日
租税教室 (3年生)



12月11日
北海道アイヌ出前授業 (4年生)



12月25日
体育大会



12月22日
ダンス発表 (2年生)



12月12日
薬物乱用防止教室 (6年生)

言葉の力〜子どもたちの未来へ〜

長万小学校長 附 田 勇 人

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる
とげとげた家庭で育つと、子どもは、乱暴になる
不安な気持ちで育つと、子どもも不安になる
「かわいそうな子だ」と言われて育つと、子どもは、みじめな気持ちになる
子どもを馬鹿にする、引っこみじあんな子になる
親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる
叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう
励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる
広い心で接すれば、キレる子にはならない
誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ
愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ
認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる
見つけてあげれば、子どもは、頑張り屋になる
分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ
親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る
子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ
やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもは、やさしい子に育つ
守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ
和気あいあいとした家庭で育てば、子どもは、この世の中はいいところだと思えるようになる

(『子どもが育つ魔法の言葉』ドロシー・ロー・ノルト、レイチャル・ハリス著)

これは二十数年前、私が教諭時代に勤めていた小学校の職員室で、後輩の先生の机の右隅にあった言葉です。当時、私は子どもが生まれたばかりで、日々、子どもや家、学級のことを考えながら働いていました。そんな時、何気なく目に留まったこの言葉が、私の心に飛び込んできました。親としてのあり方と同時に担任としての子どもへの接し方について気付かされ、親や教師、大人としての立ち居振る舞いについて考えさせられました。その先生は「この言葉を心の拠り所に教員を頑張っています」と話していました。

私は、この『魔法の言葉』と出会い、子育てや教育で悩んだ時、そして、これから歩もうとする時に自らの心の支えとなっているほど、影響を受けました。現在、校長となり「子どもに寄り添った教育」を経営理念として進めています。この理念の根底には、心に響いた、この言葉への思いが流れています。情報化が進んでいる現代社会では、多様な言葉(情報)があふれています。私たち大人が社会の大本となり、子どもたちが安心して歩むことのできる「未来」につながる言葉を残していきたいものです。